

INFLUENZA VACCINES FOR THE WORLD 2015 (IVW2015)参加報告

(2015年10月6日～9日, アルブフェイラ)

阿部元治¹⁾, 城野洋一郎²⁾

1) (一財)化学及血清療法研究所研究開発部第四グループグループリーダー

2) (一財)化学及血清療法研究所常務理事

2015年10月6日から9日にかけて、ポルトガル・アルブフェイラで開催されたIVW2015に参加したので報告する。IVWはインフルエンザワクチンに特化した国際学会で、ESWIおよびOptions for Control of Influenzaを補完する位置付けとなる。2004年にポルトガル・リスボンで第1回が行われ、その後2～3年おきに開催されており、今回で5回目となる。約70のオーラルおよび約30のポスター発表が行われ、参加者は約130名であった。

今回のIVWでは、現在のインフルエンザワクチンの有効性の問題が主要トピックであった。以下、筆者が興味をもった演題について紹介する。

1. ユニバーサルワクチン

従来からの手法であるHA stalk, M2e, NP, M1がターゲットのものが多かったが、HAのheadとstem部分からエピトープを人工的にデザインするGeorgia大学のCOBRA(Computationally Optimized Broadly Reactive Antigen)技術は第2世代となっており、よりブロードな免疫原性を得

ることが可能となっていた。この技術をH1N1に適用し、ユニバーサルの期待がもてる動物試験データが紹介された。今後、H3N2に適用する予定とのことであったが、H3N2はH1N1よりも抗原性がブロードであるので、デザインが難しいとの感触が示された。

また、Oxford大学からは、MVA-NP+M1(NPおよびM1を発現した replication-deficient modified vaccinia virus Ankara)のデータが紹介された。

ユニバーサルワクチンには、抗原ドリフトだけではなく、パンデミックにも対応できる能力が要求されるとの見解が示された。そのためには、T細胞応答の誘導能が重要であり、その観点からMVA-NP+M1を現在開発中とのことであった。また、リコンビナントH5, H7などのHA抗原をMVA-NP+M1と同時に接種した場合、パンデミックウイルスのHA抗原に対する交叉T細胞応答が増強される可能



会場風景①